

ルドヴィーコ・カラッチ《剛毅と節制》再解釈 —イコノグラフィの観点から—

山本樹（東京藝術大学）

ボローニャ旧市街中心部、現在のルーズヴェルト広場に面したパラッツォ・カプラーラの一室には、ルドヴィーコ・カラッチのフレスコ画が現存する。邸宅の暖炉上装飾として制作された本作は、19世紀半ばに剥がされてカンヴァスに移された上で倉庫に収蔵され、ボドマー（1939）による検証を経て、古い史料が伝えるルドヴィーコの作品と同定された。

作品は、横並びに立つ二人の女性像を描いている。伝記作者マルヴァジーアは「暖炉上に描かれたふたりの美しい人物像」と伝えるのみで（1686）、主題については明確に言及していない。また制作動機や年代についても知られていないが、フランチェスコ・モランディ（通称テッリビーリア）設計とされる邸宅正面扉口の楣部分に1603年の年記が認められることから、室内装飾も時期を同じくして制作されたと考えることが出来る。

二人の人物像の間には焚火が煌々と燃えている。右側の女性はこれに向かって剣を振り下ろし、左側の女性は頭上に掲げた壺から水を注いでいる。暖炉の上に燃える火を描き、そこに水を注ぐという図様が、既にしてカラッチ流のジョークではある。この二人の人物のアイデンティティについて、先行研究の記述には前者に対し〈剛毅 (Fortezza)〉あるいは〈力 (Forza)〉、後者に対し〈節制 (Temperanza)〉あるいは〈穏健 (Mansuetudine)〉という揺らぎが見出される。

確かに似た概念ではあるが、発表ではこれらが視覚表象のレベルでは異なることを意識しながら問題を整理したい。たとえば右側の人物像は、右手に剣、左手に松明を携え、傍らに獅子を侍らせているが、この図像とチェーザレ・リーパ『イコノロギア』における〈力〉の擬人像の間には看過しえない類似性が認められる。リーパの寓意図案集は1593年の初版では文章のみであったが、1603年には最初の挿絵付き改定版が刊行されており、これは本作の推定成立年代と一致する。おそらくカラッチは複数の版本を参照しながら本作の図像を考案したのであろう。その上で、感情を理性によって制御するという統治者の理想的資質が「炎を水で鎮める」図像に託されていることを前提としながら、暖炉上の火の象徴性を、同時代的な文脈からより精緻に読み解きたい。

ルドヴィーコはファルネーゼ家に出仕した従兄弟アンニーバレを頼って1602年にローマを訪れ、ボローニャに帰還後、明確な後期様式へと移行してゆく。この時期、対抗宗教改革的な理念がサン・ミケーレ・イン・ボスコの回廊の聖人伝（1604–05）のような大規模な宗教画として結実する一方、神話や寓意図に取材した世俗主題もまた、個人の邸宅を飾る小品として描かれ続けていた。パラッツォ・カプラーラのフレスコ画は、暖炉上という場がカラッチにとってそうした自由な創意の場であったことを示す一例として、その画業の中に位置付けうるのである。